

アート & カルチャーでねりまをもっと楽しく

NERICUL

別冊

vol.20.1

(公財) 練馬区文化振興協会情報誌 [ねりかる] vol.20.1



インタビュー

久保 法之 カウンターテナー

練馬区演奏家協会コンサート

武満徹の世界

| 音 | 色彩 | 言葉 |

——カウンターテナーというと日本ではあまりなじみのないパート（声種）かと思いますが、始めたきっかけは何でしょうか。

カウンターテナーは、ファルセット（裏声）で歌う男声パートのことです。

僕は小、中学校とも合唱部に入り、ずっとファルセットで歌っていました（ボーイソプラノ）。その後、地元鹿児島音楽高校に進学して、ピアノ科でしたが副科の声楽ではファルセットで歌っていたんです。当時は、昔の合唱部の頃みたいな感覚で、ただファルセットで好きなように歌うという感覚以外にカウンターテナーという発想自体はありませんでした。そうしたら、現在の歌の師匠（齊藤玲子氏）が高校最後の副科試験の後、「君はカウンターテナーで藝大に行けるわ」とさーっと仰ったんです。先生は何気なく仰ったかもしれないんですが、高校生だった僕にはその言葉があまりに衝撃的過ぎて…鵜呑みにして、本気になってしまったんです。「えっ！自分が藝大なんて夢みたいなところを目指せるの！? 行きたい!!」と（笑）。

先生は10年間ドイツの歌劇場にいました。ヨーロッパの土壌でカウンターテナーを聴いていらっしたこともあり、僕に向いていると仰ってくださいました。当時鹿児島でカウンターテナーを目指そうなんて誰も思わないですからね、びっくりしました（笑）。「これからカウンターテナーでやっていく」とか「海外に出る」とか預言みたいなことを先生は確信を持って仰るんです。先生には今後の進路が全部見えていたんじゃないかと思うぐらい、本当に僕は藝大に行くことになって、フランス・パリに留学することになります…。

元々、音楽の教員を目指して地元の教育大学に行くために勉強していたので、先生に出会っていなかったらカウンターテナーはやっていなかったですね。

カウンターテナーについては、お客さまにはよく、神秘的だとか、この世のものじゃないとか、不思議とか仰っていただくんですが、その感じるままを純粋に楽しんで頂けたらいいなと思っています。

——フランスに留学されていますが、どうしてフランスへ留学しようと思ったんですか。

当時から非常に興味があったバロック・オペラの上演機会が日本では少なく、僕がちょうど日本で学生だった頃、フランス出身の人はもちろん、イギリスやドイツ出身などいろんなカウンターテナーがフランスで上演されるバロック・オペラにキャスティングされていました。まるでフランスで発掘されたかのように、とにかくたくさんカウンターテナーが出るオペラがたくさん聴ける、公演を探しても本当にたくさんの公演があって、様々なカウンターテナーを身近で聴ける、だからフランスに行きたいと思ったんです。

カウンターテナーって、今でこそ本当にたくさんいますが、当時は絶対数が少なくて珍しいとよく言われていたんです。向こうの歴史を遡ってみると、キリスト教会で女性が歌うことを禁じられていた時代があっ

て、聖歌の女声のパートを誰が担当するかとなったときに、カウンターテナーやカストラート（少年の美しいボーイソプラノの声を大人の声に変化させないため、変声期前の少年に去勢手術を施した歌手、17-18世紀イタリアにその歴史があります）がそのパートを担っていました。歴史的にカウンターテナーが文化として根付いているのはとても興味深かったです。

——今回のコンサートのテーマである武満徹とフランス近代音楽の関係について、どう考えていますか。

武満徹はフランス近代音楽に影響を受けた作曲家で、フランスでも名前が知られているんです。武満徹の歌曲って非常に親しみやすく懐かしささえ感じたりするんですが、他の楽曲においては、無調の瞬間がたくさんあるものや現代曲といわれる分野の曲を聴くと（作曲の技法はよく分からないのですが）、フランス近代の作品を彷彿とさせるものを感じました。ルーツを辿った時、ドビュッシー、メシアン、ラヴェルなどの影響を受けていると分かって、「なるほど！」と思いました。

武満徹がフランス近代音楽から受けた影響は何だろうと考えると、“音がまるで色として見える（ような感覚に陥る）”という点かなと思います。武満自身は和声や理論の観点から重要視しない若い時代があったと語られていますが、それもあって、もっと“感じる”、“見える”というような、感覚的な部分に訴えるものに感銘を受けたのではないのでしょうか。そうした“感覚的な”という要素こそ、フランス音楽の醍醐味なので。そんな結びつきもあり、今回は自分がフランス音楽を勉強してきたことも踏まえて、武満徹とフランス近代音楽をお客さまの前で披露できるかもと思いました。

フランス音楽に対して感じるのは、作品と演者に距離があるなということです。“喜怒哀楽の感情を客観的に表現する”という特徴があります。感情（的になっていること）の表現方法が違う、という印象ですね。例えば、「すごく好きだ」とか「悲しい」とかって歌詞を表現しようとした場合、歌詞の通りに「あ～好きだ～」「あ～悲しい」と感情を表に出せる分野とそうではない分野があって、フランス音楽は後者に当たると言うんです。

フランス留学の初めの頃のことです。先生にフランス歌曲をレッスンしてもらったとき、感情を全部見せて解放して歌ったんです。たしか、嘆きの内容を歌っていたと思います。そうしたら「そういうのはフランス的じゃない」、「もっと感情を淡々と語って」と言われました。

日本人って、ベースとして素直に感情を表に出さないところがあると思うんです。もちろん人に寄りませんが（笑）。人前で感情を出すことを、自分も良しとしないし、周りの人への配慮や特に嬉しいことを大っぴらにしないといった心理が働かないですか。自分の本音を隠していることが美德だったり、それが奥ゆかしさだったりする。そういう白黒はっきりしないグレーみたいなところは、フランス音楽にも通ずるものがあるかなと思います。フランス人って基本的にはハッキリと意見したり自己主張したりするんですが、白黒はっきりさせないグレーゾーンが好きな一面もあるなあ、と僕は感じています。

——フランスにおいて武満徹はどのような作曲家ですか。

ヨーロッパで知られている邦人の作曲家ってあまりいないと思うんですが、武満徹は向こうで“TAKEMITSU”と呼ばれるのを何度も耳にしたことがあります。

有名な「小さな空」を歌った時も反応が良くて、武満徹が作曲家を目指そうと思ったきっかけがフランスのシャンソンの「パルレ・モア・ダムール」だったり、武満自身の歌曲にもフランス語の歌詞をつけているものがあつたりと、その物事にストーリーや歴史があると、とても興味をもってもらいやすいというのはあるのかなと思います。

フランスに住んでいて思うのは、現代音楽がとっても盛んな国だなということです。試験やコンクール、オーディションなどでは、現代曲のレパートリーを入れなきゃいけなかったんです。学校の入試でも、バロック、古典、ロマン、近代に加えて、現代曲のレパートリーも課題にする学校がたくさんあります。必ず現代曲をやらされるので、現代曲という分野はとても重要な位置付けです。そういうこともあって、各国の現代曲に対してフランスでは大きな関心を持たれているのかなと感じています。

学校でやるソルフェージュ（音楽の基礎を学ぶクラス）にも現代音楽のようなことがたくさん盛り込まれて、みんな普通に答えるし分かっているんです。自慢じゃないんですけど、僕は本当に分からなくて全然ついていけませんでした（笑）。日本で僕がやってきたソルフェージュとまるで違って、本当に高度なことを早くからやっています。そういう意味でも現代音楽は重要で、フランスに根付いているんだなということはいつも感じていました。

——プログラムについてどのように考えていますか。

改めて最初の企画案を振り返ると、これじゃあお客さまはつまらないなって（笑）。武満徹の作品のルーツになったフランス近代のものばかりにフォーカスしていたので、耳なじみのないフランス近代曲ばかりを並べていて、不親切なプログラムだなと思ったんです。研究発表のようなものになってしまっていて、もちろん演奏する側は楽しんでいるんですけどね…。そこはいつも難しい点だなと思います。

プログラムをどうしようかなと考えたときに、ギターが浮かんできたんです。「オーバー・ザ・レインボー」やビートルズの「ヘイ・ジュード」など、武満徹がいろんなポップな曲をギターのための作品として編曲しているんです。

知識云々もですけど、良くも悪くもコンサートを聴いた印象ってとても大事だと思っています。「外国語ばかりでよく分からない、日本語の歌を聴きたい」という感想もこれまでよく聞いてきたので、せっかく邦人の作曲家ですし、日本語の歌詞があって、現代色や耳なじみの良さ、そういうバランスを考えたプログラムにしたいなと考えています。

——武満徹の歌曲についてどう考えていますか。

あくまで個人的な感覚ですが、武満徹の歌曲を歌うときに、悲しいことも、嬉しいことも、さらっと歌ってしまうことで魅力的になるんじゃないかと思っています。“客観的な立場で、ただ語る”みたいな感覚ですかね。“その言葉”の持つ印象とか、温度みたいなものを演奏者側が決めてしまわないことで、洗練された美しさが増すんじゃないかなと考えています。

——歌詞というものについてはどう考えていますか。

歌うものにとって歌詞は、絶対的なものです。今回の曲は谷川俊太郎さんが作詞しています。詩的というよりは、日常にありそうなことを歌っています。歌詞がついている作品は歌詞が届かないことにはどうしようもないって思うんです。それは日本語に限らず、どの言語にも当てはまるとしています。

フランス歌曲の詩を読んでいると、例えば同じ詩に違う作曲者が曲をつけている例がたくさんあるんですが、この作曲者はこの詩をこういうフレーズ感で読んだんだらうな、というのが想像できたりするんです。この人が読んだらここで盛り下がったんだとか、あの人が読んだらここが盛り上がったんだとか。読み手のテンションに合わせたのかなと想像出来る音のはめ方と言えいいでしょうか。

僕がよく歌っているバロック音楽はもっとそれが分かりやすく、言葉の抑揚に音がはめられていることがとても多いんです。言葉を見たときに、どこにアクセントが来るか迷いません。ここにこの音符が当てはめられているから、ここにアクセントが来るんだということがよく分かるケースが多いです。

——今回のプログラムの中でお勧めの曲は何ですか。

「雨の樹 素描 II —オリヴィエ・メシアンの追憶に—」です。大好きです。これを聴いたときに「これ、フランスっぽい」と思ったんです。「ここは何調」と言えない瞬間がたくさんあるんですが、でもすごく耳に心地いいと思うんです。やはりそれは、音から受け取るものが映像としてイメージしやすいからなのかなとっていて、そこはフランス近代の音楽にもとても似ている点だと感じています。

——先ほど話題に出た武満徹が編曲したギターの曲も演奏されますが、印象はいかがですか。

今回演奏する曲は、武満徹がギター用に編曲したもので、出版されているオリジナル譜を演奏します。もともとの曲も耳なじみがありますが、僕が持つ印象はノスタルジックという感じです。武満徹はジャズもすごく好きだった人ですし、その分野の勉強もしていたので、編曲にそういう要素もあるかなと思います。編曲って、もともと出来上がっているものに手を加えるものなので、その曲をどういう雰囲気にするかは、編曲する人の色がとても出ますよね。



久保 法之

東京芸術大学卒業、同大学院修了。在学中多数受賞。2014年モントリオール国際音楽祭（カナダ）に招致される。2014年第29回練馬区新人演奏会出演者選考オーディション優秀賞受賞。2015年に渡仏し研鑽を積み、2020年にはバウ・コレギウム・ジャパン「マタイ受難曲」、BCJオペラ公演「リナルド」に出演。2015年フラム国際コンクールファイナリスト（フランス）、2017年レオポルド・ペラン国際コンクールセミ・ファイナリスト（フランス）。練馬区演奏家協会会員。

——フランスの近代音楽には、「ここは何調」と言えない部分もありますよね。

そうなんです。“点”を見たときに、ここは何調と言えないんですよ。

例えばドミノならきれいにハマるけど、ドレファのような不協和音は、それ単体で聴くと不協和音ですが、曲の流れの中でそういう重なりが聴こえて来ると、脳が刺激を受けるというか、「洒落ているな」って感じたりするんですよ。

——(クラシック音楽を)演奏する上で意識していることはありますか。

演奏することは“伝統芸術”だと感じています。“解釈”はもちろん色々あっていいと思うんですが、演奏者側の“欲”という形で表に出てくると、その作品が別物になってしまいます。何かしないと、何か奇をてらったことをやらないと、人と違うことをやらないと…そういう思考に走ってしまうと間違いが起こると僕は考えています。色や個性は演奏者が変われば勝手に出てくるものだと思うので、自分個人の都合で表現したり演奏したりしないということや、伝統のものを表現し続ける立場を忘れないようにしたいと思っています。

——そのために何か気をつけていることはありますか。

僕はバロック音楽を演奏することが多いんですが、バロックは楽譜にヒントや答えが書いてあることが多いんです。楽器の性質上という観点だったり、言葉のアクセントや、言葉そのものが持つ力が生きるように初めから音がはめられていたり。それを忠実に演奏するだけで魅力的なものになると僕は信じています。自分で何かしようとしなくても楽譜に書いてあることをやったら、すでに作品は美しい。そういう感覚を与えてくれたのがバロックなんです。だから僕は、バロック以降の音楽もそういった観点で演奏すれば間違いは起こらないと思っていて、自分の“こうしたいから”ではなくて、楽譜から“理由”を考えられる演奏者を目指したいと思っています。

2020年11月9日練馬文化センターにて

練馬区演奏家協会コンサート 武満徹の世界～音・色彩・言葉

2021年3月5日(金) 19:00 開演 (18:30 開場)

会場 大泉学園ゆめりあホール

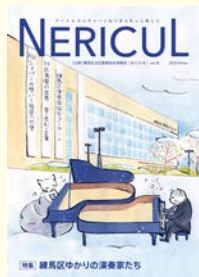
出演 久保法之(カウンターテナー)、巖崎文彦(ギター)、浅井文(ピアノ)

曲目 アーレン(武満徹 編曲) / “ギターのための12の歌”よりオーバー・ザ・レインボー、
武満徹/雨の樹 素描II -オリヴィエ・メシアンの追憶に-
ドビュッシー / “艶なる宴 第2集”より感傷的な対話 ほか

※予告なく変更となることがございます。あらかじめご了承ください。

料金 全席指定 1,000円 / 友の会 900円 ※未就学児のご入場はご遠慮ください。

チケットの販売状況等については大泉学園ゆめりあホールホームページをご覧ください。



NERICUL vol.20 2020 winter

2020年12月25日発行

contents

- 01- 特集 練馬区ゆかりの演奏家たち
- 03- 練馬文化センター・大泉学園ゆめりあホール 1-3月スケジュール
- 04- 練馬区立美術館 1-3月スケジュール
- 05- 石神井公園ふるさと文化館 1-3月スケジュール
- 06- イベントレポート 絵本とあそぶ会(石神井公園ふるさと文化館)

アートのカルチャーでねりまをもっと楽しく
NERICUL

(公財)練馬区文化振興協会発行(ねりかる) vol.20 2020 Winter

別冊 NERICUL (ねりかる) vol.20.1

発行日 / 2021 (令和3) 年2月25日

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、掲載イベントが中止となる場合がございます。詳しくは、お問い合わせいただくか、各施設のホームページ等をご覧ください。

発行：公益財団法人練馬区文化振興協会 東京都練馬区練馬 1-17-37 TEL 03-3993-3311 FAX 03-3991-9666 HP <https://www.neribun.or.jp>